

明治5年元旦、73歳の安井息軒は元旦に「瓦全」（がぜん）と書きます。瓦全とは、「瓦（かわら）のようにまっ平らに生きる。」という意味です。反対の意味の言葉は「玉碎」（ぎょくさい）で、「玉のように砕け散る」という意味です。清武の藩校「明教堂」、日南飢肥の「振徳堂」、江戸の「三計塾」、更には昌平坂学問所で約2千人の素晴らしい弟子たちを育て、数々の学問的偉業を成し遂げた大儒学者、自らの幅広く奥深い学問を弟子たちに伝えることによって、日本を近代化に導いた知の巨人、安井息軒。



息軒の生涯にはたくさんの歓びと栄光がありました。しかしながら一方では、さまざまな不幸や挫折が息軒を襲います。次女、三女はわずか5歳、四女は22歳、将来を嘱望した才気あふれる長男は20歳でいずれも病死。残された次男も26歳で…。その嫁も、18歳で…。美しい最愛の妻、12歳年下の佐代も息軒63歳の時に50歳で亡くなってしまいます。右上の書を書いた頃、生きていた家族は長女の須磨子とその子どもの糸子、小太郎、次男の子息の千菊、そして後妻の楨子だけでした。弟子たちの中にも、幕末から明治初頭の混乱の中で亡くなった弟子もたくさんいます。息軒は大いに悩みました。自分だけが瓦のようにまっ平らに、何もせず（決して何もしなかったわけではないのですが…）生きながらえていていいのだろうか…。

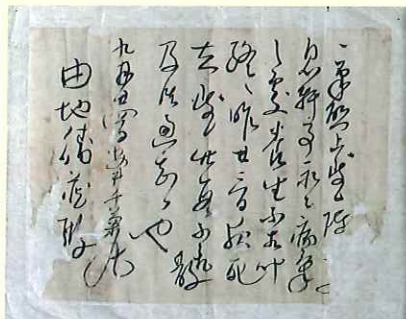
実は瓦全の生き方は父、滄洲（そうしゅう）の遺言でもあったのです。大坂で、そして江戸で学問に励み、立派に修めた息軒ですが、若い頃は剛直なところがあり、この点だけは慎むようにと父に遺言され、それを貫いてきた息軒なのでした。そのことで学者として大成し、たくさんの素晴らしい弟子たちを育ててきた息軒。これでよいのだ。いや自分だけがこうして…。この書を書いた時の息軒の胸中はどのようなものだったのでしょうか。

決して望んだわけではないでしょうが、結果的に「玉碎」的な生き方、太く短い生き方をしたのは、例えば坂本龍馬や吉田松陰、飢肥の小倉処平…。歴史上のヒーローと呼ばれる人たちは「玉碎」的な生き方をした人が多いのでしょうか…。息軒は「太く長く」、「瓦全」の道貫いて、数々の偉業を達成したのでした。書には、息軒の号の一つである「半九」の落款があります。

秋の行事等ご案内

本年8月、湯地貞康様から同家に代々伝わる書簡をご寄託いただきました。早速ですが秋のミニ企画として展示します。息軒の孫の小太郎から清武の旧知に宛てた息軒の死亡届や極めて珍しい長女須磨子の書簡等で、当時の様子を知ることのできる貴重な資料です。どうぞご覧ください。

秋のミニ企画開会



千菊による息軒死亡の知らせ

期間：10月14日～12月27日

時間：9：00～16：30

（月曜休館、月曜祝日の場合は翌日休館）

安井息軒記念館講座

第5回演題

「息軒と清武」

講師

安井息軒顕彰会

岩切 哲

期日 11月18日（土）

第6回演題

「女性の目線から見た息軒」

講師

安井息軒記念館

長野 智愛子

期日 12月9日（土）

いずれも 10：00～11：45

会場 宮崎市安井息軒記念館

新規申込の場合だけ ご住所とお名前、ご連絡先をお電話、FAX、葉書、またはメールでお知らせください。

連絡先は1面をご参照ください。